

イタリア労働運動の分裂 (1906年～1908年)

横山 隆作

I ま え が き

1906年から1908年の時期のイタリア労働運動においては、大衆組織の分裂とセクト的な対立によって、労働運動の混迷があらわになった。本稿は、本誌前号掲載の拙稿¹⁾に続き、イタリアの革命的サンディカリズムに注目しつつ、労働運動の分裂・対立の様相を歴史として観察しようと試みたものである。

注

- 1) 拙稿、イタリアにおける革命的サンディカリズムの形成とゼネラルストライキ(1903年～1906年)、『淑徳大学研究紀要』第21号(1987年3月刊)、97～123頁。

II 革命的サンディカリストの分裂

1906年10月7日から10日までローマにおいて、イタリア社会党第9回大会が開催され、党員34,842人の代表580名が集った²⁾。

この大会の主導権をとったのは、前回大会以来党主流派となっていた統合派(integralista, 中間派)であった。統合派のモルガリ(Oddino Morgari)は、彼が提出した決議案とこれを解説する演説において概略次のような路線を示した。

原則の問題としては、最終目標を「生産手段の民主的社会化」とし、また活動方法すなわち階級闘争の原則として、「ブルジョア社会の胸中に入りこむ社会主義変革の漸進性の基準」を提示した。そして目標を達成するために、「合法的手段を保持する」、しかし「支配階級がプロレタリアートに対して公権力の進歩的獲得の合法的な道をもしも妨げようとする時には、党は暴力の行使をも留保する」。

戦術の問題としては、原則の宣伝の放棄、権力との拘束された協力、諸友党(議会極左派

の急進党と共和党)との制度的同盟を拒否した。すなわち、国会(下院)活動については、「社会党議員団は政府の方針を支持する意味の投票はできない、ただし議員団がかかる規範から逸脱する必要をもつような異常事態があらわれない限り」とし、また選挙戦術については従来の路線を踏襲して、各選挙区において社会党独自候補をできるだけ立て、決戦投票の段階まで社会党候補が進めなかったり、初めから社会党支持者が極めて少数である場合にのみ、友党の候補者を支援するという方針である。

このような統合派の路線は、社会党改良派(右派)が、君主制についてははっきりと批判せず、ジョリッティ政権と協調的であり、急進党などとの選挙協力を推進しようとしていることへの批判であった。しかし同時に統合派は、「社会主義変革の漸進性」という点で改良派と提携し、改良派のピッソラーティらの支持をとりつけていた。一方、革命的サンディカリスト(左派)に対してモルガリは、「社会立法が私的生産様式に切りこむことはないというのは全く真実ではない」と述べ、また「頻繁かつ過度のゼネスト」や「直接行動」の行使を拒絶し、革命的サンディカリズムは「無政府主義的退化」であり「現実感覚の欠如」とであると決めつけ、はっきりと決裂した³⁾。

この大会において改良派は、統合派との路線の相違にはほとんど目をつぶって、革命的サンディカリストに対する攻撃に集中した。トゥラーティ(Filippo Turati)は大会の演説の中で次のように述べた。

「革命的サンディカリズムは社会主義の石器時代を表わしている」、「彼ら(サンディカリスト)は、神秘主義者、救世主信仰者(mesianici)、……まるっきりの耽美主義者⁴⁾、純粹のイデオログである」。「我々(改良主義者)の行動のすべて、我々の方法のすべては、彼らの行動と彼らの方法の確実な対照である」⁵⁾。

モディリアーニ⁶⁾は、改良派の路線を、党の直接的な行動綱領についての報告の中で示した。これは、社会立法による改良、司法改革、農業開発、公共事業の振興、反教権主義闘争(例えば公立小学校における宗教教育の禁止)、普通選挙制度の獲得などを当面の運動方針とするものであった。そしてまたモディリアーニは演説の中で、社会主義(=改良主義)とサンディカリズムは対照的だとし、「社会主義は自然的運動であり、したがって漸進的かつ複合的であり、サンディカリズムは、加速的方法、したがってプロレタリア運動の人工的方法たらんと欲している」、「社会運動、それは人々の意志、諸グループや諸政党の意志を越えたものである」と語った⁷⁾。

統合派と改良派の攻撃に対して、革命的サンディカリストのラブリオーラ(Arturo Labriola)は、自派の決議案を提出し、演説の中で『共産党宣言』を引きながら次のように主張した。

「労働者の経済的アソシエーション(associazione economica=労働組合)は、したがって社会革命を実現する機関として構想される。それ(アソシエーション)はただ、ブルジョ

ア体制が座している基盤、すなわち賃金労働者達の競争を破壊するものであり、それはただ労働者の社会的力を形成するのである。分割されない階級としてのプロレタリアートの進歩は、労働者のアソシエーションの進歩である⁹⁾。」

革命的サンディカリストのレオーネ (Enrico Leone) は大会において次のような所信を表明した。

「社会主義についての2つの基本的な考え方がある。より前進的・民主的なさまざまな社会階層との協力によって、社会主義の入口である進歩的改良の一筋の道をたどって歴史を歩むのが発展の法則だと信ずる考え方と、他方、ユートピアというマルクス以前の時期を越えたことを表すものとしての、マルクス主義精神に導びかれて、社会主義運動は唯一プロレタリアの基盤の上に、唯一賃金労働者の利益の中にのみうちたてられなければならないという考え方とである。」これは前者が改良主義、後者が革命的サンディカリズムを指している。またレオーネは、改良派は生産手段の社会化ということを企業の国有化と混同し、労働者の社会主義と国家の社会主義とを混同する国家的集団主義だと批判した。そして言った。「我々が少数派だというのは正しいが、しかしサンディカリズムは社会主義運動のもっとも戦闘的で生き活きとした部分を形成している⁹⁾。」

結局この大会における路線論議では、統合派のモルガリが提出し、改良派も支持した決議案が26,493票を得て採択され、ラブリオーラ提出案は5,276票、他に非妥協派のレルダ(Giovanni Lerda)が提出した決議案は1,161票を得たにとどまった。統合派と改良派の連合の勝利であった。

イタリア社会党第9回(ローマ)大会の後、革命的サンディカリストの新聞・雑誌がいくつか創刊された。1906年12月15日に、スイス領のルガーノで、『パージェネ・リベレ』(Pagine Libere)誌がオリヴェッティ(Angelo Oliviero Olivetti)によって創刊されたが、この雑誌は革命的サンディカリズムを中心に、諸分野の知識人の前衛的新思潮に「自由な頁」を与えようというものであった。また1906年12月24日には、ローマで日刊紙『行動』(L'Azione)が創刊され、1907年1月5日にはミラノで、かつての『社会主義前衛』紙にかわる週刊誌『階級闘争』(Lotta di classe)が創刊された。そしてこれらのジャーナリズムでは、イタリア社会党の結党以来の伝統的経路としての議会主義・漸進主義から離脱して、新たな社会主義運動を展開しようという声が高まっていった。

1907年6月29日から7月2日にかけて、エミリア・ロマーニャ州フェッラーラにおいて革命的サンディカリストの第1回全国大会が開催された。この大会に参加した団体の加盟者数は、サンディカリスト諸グループ1,359名、社会党諸支部727名、青年団体435名、労働組合等76,843名の合計約85,000名であった¹⁰⁾。

この大会は結論として、「労働者階級の解放が労働者自身の事業であることを考え、イタリ

ア社会党が階級的利益に応えない人物によって構成されていることを思い、労働組合が労働者階級にとってその解放に十分な条件であり、そして党においてサンディカリストが貴重なエネルギーを無駄に費し続けていると確信するがゆえに、社会党から離脱すると決議した。革命的サンディカリストはこのように社会党という政党から分裂したが、労働組合運動においては、サンディカリストの全労働者組織は「ラジカルな変革のために」労働総同盟に大挙加盟するという決議を行った¹¹⁾。

社会党からの分裂・独立という決議は、大会に参加した人々すべてによって直ちに実行されたわけではなかった。例えば、サンディカリストの地盤である社会党ナポリ支部の分裂は1908年10月初めになってからであり、この時グワリーノ (Eugenio Guarino) は社会党に残った¹²⁾。またこの大会に参加したラッザリ (Costantino Lazzari) やレルダ達の社会党非妥協派は分裂に同調せず、社会党にとどまった。

1907年10月11日、ミラノでは、ストライキ中のガス産業労働者が、スト破り労働者が列車で運ばれてきた時にこれを阻止しようとして護衛の官憲と衝突し、官憲の発砲によって死者1名、負傷者5名以上を出した。この事件に抗議するストライキが翌12日ミラノでおこり、ミラノ市はほとんどゼネスト状態となった。抗議ストはローマ、パルマ、フェッラーラ、ボローニャその他の革命的サンディカリストの強い都市に波及した。クレモーナなど北イタリアの一部では国鉄の従業員もストライキに参加した。しかし13日にはミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロが主導権をとり、ミラノ円型競技場の大集会で、「労使紛争への公権力の不介入」要求と、翌朝から労働に復帰することを決議した。同じく13日、社会党執行部と労働総同盟の指導委員会も協議して、ストライキの中止を決定し、全国に指令した。

ところがトリノでは、13日にサンディカリストが主催した1,000名ほどの労働者集会で抗議ストが決議されると、14日朝には多くの工場で労働者がピケを張り、ほとんどゼネスト状態となった。この事態に、トリノ工業家同盟は10月15日より200工場3万人の労働者に対する48時間のロックアウトを行って対抗した。トリノのサンディカリストはさらにこのロックアウトに対して3日間の全国ゼネストを労働者集会で決議した。しかし改良派が力をもつ社会党、労働総同盟、トリノのカーメラ・デル・ラヴォーロの指導部は一致してゼネストを拒否した。トリノでは労働者集会の決議とカーメラのスト中止指令とが矛盾し、ゼネストは参加者が減って尻すぼまりに終わった。

さらにこの問題は尾を引き、10月18日にはさきの12日にストライキに参加した国営鉄道労働者に対する当局の厳しい処分が発表された。イタリア鉄道員労働組合 (SFI) は、この処分に対する反撃の全国ゼネストもしくは鉄道全国ストを労働総同盟および社会党に要請した。しかし労働総同盟と社会党はこの要請を拒絶した¹³⁾。

これら一連の事件の後、1907年11月2～3日、革命的サンディカリスト系の労働者組織が

エミリア・ロマーニャ州パルマに集った。参加した組織は、イタリア鉄道員労働組合(SFI)、全国海運労働者連合(F.N.L.mare)、皮革工組合、および16のカーメラ・デル・ラヴォーロ(パルマ、ピアチェンツァ、ボローニャ、フェッラーラ、サヴォーナ、サムピエルダレーナ、ラスペツィア、ガッラルーテ、ヴィチェンツァ、エムポリ、ピオンビーノ、アンコーナ、他3)などで、加盟者総数201,168人を擁していた。

デアムブリス(Alceste De Ambris)とバディアリ(A.Badiali)は、以下の4つの理由をあげて、労働総同盟からの脱退と全国抵抗委員会(Comitato Nazionale della Resistenza)を結成するという決議案を提出した。その理由というのは、1)労働者組織は、すべての政党・党派の外に、賃金労働者と雇主とを消滅させる闘争をたたかわんとする者すべてを胸に迎え入れなければならない、2)抵抗運動(労働組合運動)においては職業別地域別の組織に最大の自治が許されなければならない、3)全国組織の指導者は、労働者集団の立法者や主人としてではなく、労働者集団の執行委員会としてのみ考えられるべきである、4)直接行動——ゼネラルストライキという最高の時に頂点に達する——によって、プロレタリアの意志、それが防衛であれ抗議であれ獲得であれ、を確認するために力と意図とを調整するという指導者の特別任務があるべきである、ということであった。

この提案に対してロッソーニ(Edmondo Rossoni)は内部で闘うために労働総同盟に留まるべきだとの反対意見を表明し、またピアンキ(Michele Bianchi)は労働総同盟に対して統一労働組合運動を形成する集会を呼びかけるように提案した。

結局、デアムブリスの決議案が108,966票を得て採択され、革命的サンディカリストは労働総同盟からも組織的に分裂し、独自に活動することになった。そして1907年11月16日には全国抵抗委員会の機関紙『リンテルナツィオナーレ』(L'internazionale)がボローニャで創刊された。

しかし全国抵抗委員会には、フェッラーラやサムピエルダレーナのカーメラなど少数の組織しか加入せず、全国海運労働者連合は労働総同盟に留まり、鉄道員労組は翌1908年2月に加入したが、それでも全国抵抗委員会傘下の労働者総数は約4万人にすぎなかった。そして1909年5月にはこれらサンディカリスト系組合は再び労働総同盟に加盟することになる¹⁴⁾。

注

2) イタリア社会党第9回ローマ大会については、Alceo Riosa, *Il sindacalismo rivoluzionario in Italia*, De Donato, Bari, 1976, pp. 336～341.およびErnesto Ragionieri, *Il movimento socialista in Italia (1850-1920)*, Teti, Milano, 1976, p.112.およびGiuseppe Mammarella, *Riformisti e rivoluzionari nel PSI 1900-1912*, Marsilio, Venezia, 1968, pp. 199～206.等による。

3) モルガリの演説は、Girolamo Sotgiu, *L'Italia di Giolitti*, Sarda Fossataro, Cagliari, 1972, pp. 325～338.

- 4) 耽美主義者という悪口は、あるいは「芸術のための芸術」という標語とも関係があるのかもしれない。
- 5) Gian Biagio Furiozzi, *Il sindacalismo rivoluzionario italiano*, Mursia, Milano, 1977, p. 94.
- 6) Giuseppe Emanuele Modigliani (1872年生～1947年没)は、画家 Amedeo Modigliani の兄であり、労働運動家やアナーキストの弁護士として活動してきた。
- 7) Sotgiu, *L'Italia di Giolitti*, op. cit. , pp. 339～357.
- 8) Furiozzi, *Il sindacalismo*……, op. cit. , pp. 85～86.
- 9) Sotgiu, op. cit. , pp. 358～384.
- 10) Riosa, op. cit. , p. 361.
- 11) Furiozzi, op. cit. , p. 37.
- 12) Giuseppe Aragno, *Socialismo e sindacalismo rivoluzionario a Napoli in età giolittiana*, Bulzoni, Roma, 1980, pp. 75～78.
- 13) Giorgio Candeloro, *Storia dell'Italia moderna VII 1896-1914*, Feltrinelli, Milano, 1978(1974), pp. 240～241. および Paolo Spriano, *Storia di Torino operaia e socialista*, Einaudi, Torino, 1972(1958), pp. 166～168.
- 14) Idomeno Barbadoro, *Il sindacato in Italia*, Teti, Milano, 1979, pp. 444～447.

III いくつかの労働組合運動

イタリア経済も1907年秋に、アメリカ合衆国の金融恐慌から始まる世界的な恐慌にまきこまれた。9月末に Società Bancaria Italiana という金融機関が倒産寸前となり、大銀行の Banca Commerciale Italiana や Credito Italiano に影響した。工業部門では、自動車、綿糸、製鉄、造船、精糖などが深刻な不況におちいった。地域ではことにジェノヴァ一帯の状況が悪かった。そしてこの恐慌によって失業者が激増したが、食料品価格はあまり下らず、時には高騰する場合さえあり、大衆の生活窮乏感が強まった。イタリア経済はこの後、1909年に恐慌を脱したものの、全体としては第一次大戦まで低調な景気が続いた。ストライキ統計によれば、1908年から1910年にかけてストライキが減少しているが、これは不況の影響と考えられる。

次に5つの地域的な労働組合運動のケースをとりあげるが、これらには、労働組合運動における厳しく対立的な労使関係の面と、労使双方が協調して関係の安定を求める面との二面が、労働運動の諸潮流の運動方針の違いに応じて、はっきりとあらわれている。

1906年10月27日、トリノの自動車製造会社イタラ (Itala) と金属労働組合 FIOM との間に、1907年から3ヵ年有効の労働協約が締結された。この協約は、後の工場評議会運動につながる工場内部委員会設置の最初期の事例として有名であるが、この協約の主旨は次のようなところにあった。すなわち第一条、イタラに必要な全従業員を FIOM が供給する、とあり、また別の協定において FIOM トリノ支部の職業紹介所設置と FIOM 加盟者の優先雇用が認められていた。さらに第十条、FIOM は……ストライキ等を行わない、おこした場合は損

害を弁償する、ただしトリノの勤労階級のゼネストを原因とする労働の放棄はこれにあたらぬ。第十三条、本協定遵守のため FIOM は60,000リラをイタリア銀行に預託する。要するにこの協定は、企業側がクロード・ショップ制と労組の職業紹介所を承認する、すなわち FIOM の労働力独占を承認するが、その代り労働者はストライキを行わないという「平和協定」であった。

この協約に対して社会党最右派のボノーミ (Ivanoe Bonomi) は新聞紙上で肯定的評価を与え、労働者階級の総運動(ゼネスト)の時にはスト権は確保されていると弁護した¹⁵⁾。おそらく当時の FIOM 書記ヴェルツィ (Ernesto Verzi) はボノーミ派であったのであろう。

反対に当然ながら革命的サンディカリストはこの協約を厳しく批判し、さらにヴェルツィが会社側から個人的に金を受けとったというスキャンダルを暴露して攻撃した。他のモルガリら統合派とトゥラーティ系改良派も、スト権喪失は労働者の奴隷化であるという原則論は保持していたから、団体交渉と労働協約締結は良いことだが、「平和協定」は行き過ぎだと考えたものと思われる。

結局この1906年10月のイタラ・FIOM 協定は、1907年10月のトリノのゼネストにイタラの労働者が大挙参加したことと、1907年恐慌によって会社が生産縮小=解雇を必要としたことにより、1907年10月末ごろ破棄されてしまった。また FIOM 書記ヴェルツィは1907年末に解任され、その後 FIOM の指導権は1909年7月25日に、ブオッツィ (Bruno Buozzi) ら社会党改良派=労働総同盟主流派の手に移った¹⁶⁾。

20世紀になってカトリック系労働組合運動という新潮流が生れた。

1904年にヴァティカン(教皇ピオ10世)は「大会事業団」を解散し、1906年に新たな3つのユニオンを作った。イタリアカトリック民衆連合 (Unione popolare tra i cattolici d' Italia), イタリアカトリック経済社会連合 (Unione economico - sociale dei cattolici italiani), イタリアカトリック選挙連合 (Unione elettorale cattolica italiana) であり、このうち経済社会連合は労働組合(白色組合と呼ばれる)、相互扶助協会、共同組合、信用金庫を統轄していた。カトリック系労働組合は、1907年には183組合であったが1910年には374(工業234、農業140)、加盟労働者数約10万人に伸長した¹⁷⁾。

ロムバルディーア州はカトリック労働運動の強い地域であるが、ブレッシア県のカトリック農民運動は1907年に先進的な事例を示した。

ブレッシア県のカトリック労働組合連合は1907年1月23日に、小作契約と農業生産についての調査を決定し、実施した。そして連合は2月18日から22日に、新たな小作契約と農民に対する公正な報酬——これらは地主、農場経営者、自作農に受けいられるようなもの——を作成するため、調査団を編成することを決めた。調査団は11名で、1907年3月13日に最終報告を行った。これにもとづき、3月16日には、議長として農業巡回聖堂の司祭、他に県(行

政) 代表, 地主・農場経営者代表, 農業学校教授, 孤児院長, 小作農代表, 労働組合代表などによって構成される会議がブレッシェ県庁で開かれ, ブレッシェ平野における小作契約改良についての決議を行った。

この新しい小作・農業労働協約は, 麻を栽培しない場合, 麻を栽培する場合, トウモロコシの打穀分前契約をする場合に分かれており, 具体的内容として, 牛飼 (常雇労働者) の年間サラリー額, 打穀分前の量, 日雇労働者の日賃金, 刈取労働者の刈取単位面積当り賃金, 労災社会保険加入義務, 婦人労働者 (常雇労働者の妻など) の日賃金等々の事項, さらに仲裁委員会, ストライキを行わないことなどを定めていた。

この協約が作られたために1907年春夏には, ブレッシェ平野では農業争議がおこらなかったといわれる。そしてこの小作・農業労働協約は, 低ロムバルディーア地方のカトリック系農業組合にモデルとして広く受け入れられた¹⁸⁾。

革命的サンディカリストはフェッラーラにおける長く深刻な農業労働争議を指導した。

1906年7月, フェッラーラ県アルジェンタ (Argenta) と周辺を組織する農業労働組合は, 新たな打穀分前契約と職業紹介所活動の承認を, 農場経営者・地主に対して要求した。県知事が仲裁に乗り出したが交渉は難行し, とうとう1906年10月3日, 1万人の農業労働者がストライキに入った。農業労働者のみならず分益小作農など (mezzadria や boaro) もストライキに加わった。10月24日には家畜飼養労働の放棄も決議された。小学校も休校になった。10月29日になって農場経営者側から打穀分前の量などについて妥協案が出されたが, 職業紹介所については結局合意できなかった。

翌1907年2月, 再び争議がおこった。農場経営者側は, 組合加盟の63家族に対して小作・打穀分前契約を解約する, すなわち解雇すると威嚇した。これに対し3月3日の農業労働者大集会は地域ゼネストを決議し, さらに3月中に常雇農業労働者や小作農も家畜飼養労働の放棄を決定した。カトリック系団体も含む近隣の労働者組織や, 社会党改良派が握るフェデルテッラ (全国土地労働者連合) もアルジェンタの農民に義捐金を送った。アルジェンタのストライキ参加農民の子供達1,200名は, 家族と離れて遠くの町まで里子に送られた。一方, 軍隊・官憲が増派され, スト破り労働者を保護した。

アルジェンタのストライキは3ヵ月間も続き, 1907年6月2日になって協定が成立した。この協定の主な内容は, 小作契約 (打穀分前の量, 賃金等) の改善, 農場経営者の課していた罰金や損害賠償の撤廃, 労使双方の代表と県知事任命委員との混合制職業紹介事務所を設立し, 経営者の一方的決定ではない順番制・クジ引き制の農業労働・小作契約斡旋制度とすること, そしてさきの63家族に対する小作契約解約を7家族を除いて他はすべて再契約すること等であった。

アルジェンタの農業争議では, 革命的サンディカリストのニコライ (Adelmo

Niccolai), マッツォルディ (Paolo Mazzoldi), パゼッラ兄弟 (Umberto Pasella, Guido Pasell) などが活躍した。フェッラーラ県のサンディカリスト系労働組合の加盟者数は、1906年春の1万5千人から1907年6月には4万人へと増加した¹⁹⁾。

1907年6月24日、今度はフェッラーラ県コッパロ (Copparo) で農業ストライキが始った。しかし6月25日に農場経営者が雇ったスト破り労働者が官憲に守られてコッパロ駅に到着した時、農業労働者が抗議行動をして官憲と衝突した事件によって、衝突現場にいた労働者だけでなく、その場にいなかった組合指導者まで多数が逮捕された。1907年7月1日のフェッラーラ会議における革命的サンディカリストの社会党離脱決議は、この事件直後に行われたものである²⁰⁾。

イタリア南部プーリア州のカピタナータ地方 (フォッジャ県とバーリ県) は農業日雇労働者 (ブラッチャンテ) の多い農業地帯であるが、ここでは1907年と1908年に革命的サンディカリストのイニシアティブによって、農業労働運動が爆発的にひろがった。

1907年9月14日、バーリ県コラート (Corato) の農民改善同盟 (男性3,000人、女性700人を組織する労働組合) は、ブドウ収穫作業について同盟の職業紹介所を承認するように農場経営者に要求した。しかしこの要求は拒否され、翌15日、改善同盟は地域ゼネストを宣言した。軍隊が警備に出動している中で、2日後、農場主のグループが農民に発砲し、モッラ (Luigi Morra) という農民が死亡、5名が負傷した。この事件後、農民と官憲・軍隊との衝突が頻発し、9月19日にはテッリービレ (Pasquale Terribile) という農業労働者がカラビニエーリに射殺された。このコラートの争議は下院でも問題にされ、おそらく政府の圧力が加かって、9月20日に農場経営者側が譲歩し、日賃金の20パーセント上げと職業紹介所の承認がなされた²¹⁾。

バーリ県チェリニョーラ (Cerignola) では、ブドウ収穫期に他所から来る移動労働者の雇用問題や、女性・児童労働者と成人男子労働者との賃金格差の問題をめぐって争議がおこり、1907年9月23日、7,000人の労働者が地域ゼネストを宣言した。軍隊・官憲が多数派遣されて、ほとんど戒厳令下のような状態となり、9月26日、農場経営者側と農民同盟との間に協定が締結された。このころ、後の世界労連議長ディヴィットリオ (Giuseppe Di Vittorio, 1892年生～1957年没) がチェリニョーラの革命的サンディカリスト系農民同盟で活動を開始していた。

1907年11月2日、フォッジャ県トルレマッジョーレ (Torremaggiore) において、ルビーノ (Filomena Rubino) という女性農業労働者がストライキ中に官憲に射殺された。彼女は32歳、3児の母であった。翌日、サン・セヴェーロ (San Severo) など近隣一帯の労働者がゼネストに突入した。警察はフォッジャのカーメラ・デル・ラヴォーロ書記トレマトーレ (Euclide Trematore) やバーリのカーメラ書記デファルコ (Giuseppe De Falco) をはじめとする組

合活動家44名を逮捕して運動を弾圧した。ゼネストは11月17日に終わった²³⁾。

1908年3月末にバーリ県の組織労働者数は39,500人(1906年には7,678人であった)、フォッジャ県では24,590人(1906年9,612人)に達した²⁴⁾。

1908年3月29日(日曜日)、フォッジャ県サン・セヴェーロは地方選挙の投票日であった。ところが朝から投票所が多数の官憲によって警備されていたため住民が不正な選挙だとして抗議し、官憲との衝突がおこって農業日雇労働者2名が射殺された。この犠牲者の葬儀では1万人の労働者が柩をかついでデモを行い、さらに大規模なストライキが行われた²⁵⁾。

1908年の春以降、不況によってプーリア州カピタナータ地方の失業者はさらに増加し、アメリカへの出稼ぎ者・移民も激増していた。コラートでは1908年5月11日から15日にかけて、15,000人の農業労働者(労働組合員)が、市の住民(非組合員)が市外の農場に日雇労働に出るのを阻止するため、市をとり囲むようにして街道の要所にピケをはるという事件がおきた。多数の官憲・軍隊が出動してピケ隊を追払ったため、今度はゲリラ戦の様相となり、100ヵ所以上の農場において農業労働者による破壊活動が発生し、5月17日には地域農業ゼネストとなった²⁶⁾。

フォッジャ県では同じく5月後半、昨年の協定の期限が切れ、農場経営者側が労働組合との交渉を拒否したため、フォッジャ、チェリニョーラ等のカーメラ・デル・ラヴォーロ加盟のすべての農業労働組合が次々とストライキに入った。チェリニョーラの農業労働者は1日の労働時間の12時間から11時間への短縮を獲得した。その他の地域では多くの場合、昨年の協定がさらに1年間延長されることになった。

カピタナータ地方の農業争議はさらに1908年中激しく続き、これに対して政府は多数の官憲・軍隊を配備する一方で、若干の公共事業と慈恵的救済対策を実施した²⁷⁾。

1908年にエミリア・ロマーニャ州パルマでおこった農業争議はイタリア労働運動史上有名な事件である。パルマのカーメラ・デル・ラヴォーロは革命的サンディカリストが掌握し、アルチェステ・デアムプリスが書記となっていた。

1907年5月の農業争議で、労働者側は農場主の団体であるパルマ農業協会から、単一賃金表の制定と労働時間短縮(農業日雇労働者は1日11時間まで、家畜飼養労働者は1日13時間まで)をかちとった。しかしパルマ農業協会は会長カッラーラ(Lino Carrara)の下、会員を増やし、会員から彼らのほぼ年間収入に等しい額の手形を提出させて脱落を防ぎ、大量の銃器を購入して「義勇軍」を作り、1908年2月に反撃に出て、前年の協約をすべて破棄した。農業協会は3月9日より、パルマ全県ですべての農業日雇労働者を無期限ロックアウトした。すなわち収穫期の前に労働者を飢餓におとし入れる作戦であった。さらに4月末には農場主側は常雇労働者もロックアウトし、市部の工場の操業も停止させたため、パルマ県の経済活動はほとんど麻痺し、住民は生活に窮した。

1908年4月30日、パルマのカーメラ・デル・ラヴォーロの代表者会議は、無期限スト賛成247票、仲裁移行賛成6票、棄権4票によってストライキを決定し、ついに5月1日、パルマ県の農業労働者2万人のストライキが開始された。

家畜飼養労働者のストライキでは、多くの農場主は実質的な損害はほとんど受けなかったが、5月上旬に一部の農場主が官憲の護衛下に家畜の県外移送を行い、労働者の阻止行動にあって、衝突事件がおこった。

デアムプリスらのカーメラ指導者達は、これは純粹かつ単純な労働放棄であって反乱ではない、挑発に乗るなど呼びかけ、ストライキを冷静に実施し、一方農業協会はカーメラが交渉に応じないのだと宣伝し、また社会党改良派はパルマの争議について、サンディカリズムは大いなるアナクロニズムであると言って、仲裁移行を主張した。

5月半ば、パルマのストライキ参加者は、工場労働者の同情ストも含めて3万人に達した。ストライキ参加農民の家では子供達を北イタリアの各地に里子に出し、パルマ駅での親子の別れに際しては官憲が厳重な警備を行ってデモ・集会を抑止したが、子供達を迎えた各市では盛大な歓迎会とデモが行われた。全国の労働組合が義捐金を送り、社会党改良派が指導する労働総同盟、フェデルテッラ、協同組合もパルマのストライキを支援した。この事件は海外にも報道され、世界各地の労働団体から義捐金が送られた。

5月末、収穫期となり、パルマ農業協会は県外からスト破り労働者を破格の高給を約束して集め、列車で運んだが、これは途中の各駅でこれを阻止しようとするそれぞれの市の労働者の激しい妨害活動にあい、結局失敗した。

いよいよ収穫期の労働不足に困った農場主側は1,000人のスト破り労働者を集め、多数のカラビニエーリが護衛する列車に乗せ、これが6月19日にパルマ駅に到着することになった。6月19日の朝、1,000人の農業労働者がパルマ駅でスト破り労働者を阻止しようとし、官憲・軍隊・「義勇軍」と激しく衝突した。スト破り労働者は護衛されて各農場に向ったが、衝突は終日続き、その夜パルマのカーメラ・デル・ラヴォーロは再びゼネストを宣言した。

6月20日、パルマ市内で再び衝突がおこり、多数の労働者が逮捕された。官憲・軍隊は市中を制圧したが、しかしオルトレトッレンテ街 (Oltretorrente) の住民はバリケードと投石によって軍隊の侵入を防ぎ、ここでのにらみあいは3日間続いた。一方、ボルゴ・デッレ・グラツィエ街 (Borgo delle Grazie) にあるカーメラ・デル・ラヴォーロには官憲・軍隊が発砲しつつ侵入し、建物の中にいた60~70名ほどのカーメラ指導者と労働組合員を逮捕した。労働者達はこれに反撃して双方に多数の負傷者が出た。日暮れとともに官憲・軍隊は一たん退いて市内各所に陣地を作った。デアムプリスと、同じくサンディカリストの指導者マゾッティ (Tullio Masotti) はそれぞれカーメラの建物の外にいたため、逮捕をまぬがれた。デアムプリスは3日間市内に潜伏した後、自動車に隠れて脱出し、スイスのルガーノに亡命した。

この間、大新聞までもがパルマの事件とデアムプリスは何処へ消えたかという記事を出すほどの騒ぎであった。

イタリア各地から革命的サンディカリストの指導者達や社会党の指導者達がパルマに駆けつけてきた。革命的サンディカリストの指導者数名は途中で予防拘禁されてしまった。パルマには社会党国会議員のモルガリやドゥゴーニ (Enrico Dugoni), そして改良派の指導者達、革命的サンディカリストのラブリオーラなどが集って協議し、おそらくは中央政府 (ジョリッティ内閣) と連絡して、6月25日の夜、パルマのカーメラの建物を返還させるとともに、会議を開いてストライキの中止を決定した。

しかしパルマの農業労働者のストライキはこの後10日間続いた。農場主側も非常に苦境に立たされた。ところが社会党の指導者達は7月上旬に「調査委員会」を作り、次のように発表した。すなわち、パルマのカーメラ指導者達 (革命的サンディカリスト) の方針と「イタリアのプロレタリアートの大多数が望む方針」との間には深淵がある云々、そして改良派が握る協同組合からの大口の義捐金を「調査委員会」が直接配分するというので、これはパルマのストライキを経済的にしめつけるねらいであった。また「調査委員会」は、パルマのストライキ参加者が3万人といわれたのは誇大報告で、実質は最高15,000人だと発言した。労働者が長期ストライキ中に生計のため、別の仕事に臨時に就くのは昔からよくあることで不思議なことではないのに、この発言はほとんど悪意の感じられるものであった。こうしてパルマの農業労働者の1908年の長く苦しい闘いは敗北に終わった²⁸⁾。

注

- 15) Spriano, op. cit., p. 144.
- 16) 河野穰, イタリア自動車産業における労使関係の展開 I, 第一書林, 1985年, 108~117頁, 116~177頁。
- 17) Candeloro, op. cit., pp. 257~259.
- 18) Sergio Zaninelli (a cura di), Storia del movimento sindacale italiano, I. Le lotte nelle campagne 1880-1921, Celuc, Milano, 1971, pp. 302~309.および Aldo Carera L'azione sindacale in Italia 1, La Scuola, Brescia, 1979, p. 127.
- 19) Alessandro Roveri, Dal sindacalismo rivoluzionario al fascismo, Nuova Italia, Firenze, 1972, pp. 193~199.なおこのアルジェンタの争議については研究者によって意見が分れているが、ロヴェリは部分的な勝利であると判断しており、敗北説を批判している。
- 20) Ibidem, pp. 207~208.
- 21) Francesco Barbagallo, Stato, parlamento e lotte politico-sociali nel mezzogiorno (1900-1914), Guida, Napoli, 1980, pp. 223~226.
- 22) Ibidem, pp. 226~227.
- 23) Michele Marinelli, Movimento contadino e partito socialista in Capitanata (1900-1908), Francisci, Padova, 1983, pp. 155~157.
- 24) Ibidem, p. 122, 138.
- 25) Vera Modigliani, Gaetano Arfè, Vittoria Pugliese Silva (a cura di), Attività parlamentare

dei socialisti italiani III 1904-1909, Esmoi, Roma, 1973, p. 424.

26) Renzo Del Carria, *Proletari senza rivoluzione* 1, Oriente, Milano, 1966, p. 408.

27) Barbagallo, *op. cit.*, pp. 239～251.および Marinelli, *op. cit.*, p. 168

28) パルマの農業争議については主として, Del Carria, *op. cit.*, pp. 409～418.および Renato Nicolai, *Emila riformista e Italia giolittiana*, Mazzotta, Milano, 1977.による。

IV イタリア社会党と労働総同盟

どの国の労働運動においても、ストライキは重要な問題として絶えず議論されている。

1907年2月、労働総同盟は、傘下のカーメラ・デル・ラヴォーロと労働組合に対し、労働総同盟の決定に反するアピールを出さないように求め、革命的サンディカリストの指導する労働組合のストライキと労働総同盟とは関係をもたないことを表明し、あわせて労働組合に対する労働総同盟の指導権を確立しようと努めた²⁹⁾。1907年7月、労働総同盟指導委員会は、諸労働組合の同盟金庫（抵抗中央金庫）を作り、ストライキを財政的に支える機関を一元化して総同盟が握り、また社会党は政治闘争の組織、労働総同盟は経済闘争の組織として機能を分ける方針を決めた³⁰⁾。

1907年8月の第2インター、ストックホルム大会では、社会主義政党と労働組合の役割を前者は政治闘争、後者は経済闘争に分けるという役割分担ないし労働組合の自主性尊重を目的とする決議が行われた。この後、1907年10月7～9日、フィレンツェで開かれた労働総同盟とイタリア社会党との指導部合同会議では、労働組合の全国組織化の推進、総同盟加盟費（分担金）の引上げ、労働総同盟と社会党のことにストライキにかかわる役割分担について等の決議が行われた。そしてこの役割分担の決議の2、3、4項は次のようなものであった。

- 2) 経済的ストライキの指導と調整は、総同盟加盟の諸組織の範囲内で、しかも全プロレタリアートの全般的利害に関わる場合、唯一総同盟に属する。これに対して全政治運動の指導は党に属する。
- 3) 総同盟と意見を異にする全国組織、もしくは全国連合（全国労組）と対立する地方組織によっておこされたストライキの取扱いについて、党は、連帯アピール、大衆的募金、支部への回状をそのアピールの総同盟との合意が決定されなければ、決して行うべきではない。
- 4) 政治的目的のストライキはいつでも党と総同盟の合意によって決定されなければならない³¹⁾。

1908年4月2日、ローマでは、工場の足場を建築中に労働災害で死亡したベルムッチ(Cesare Bermucci)の葬儀に共和党员や無政府主義者が旗を掲げて参列し、葬送行進は5,000人のデモとなった。官憲・軍隊がこれを解散させようとしたが、偶々そこへ煉瓦を積んだ荷車3台が

通りかかり、労働者は煉瓦を投げて抵抗し、官憲の発砲によって労働者3名が死亡、約20名が重軽傷を負う事件がおこった。しかし社会党と労働総同盟はこの事件に対して冷淡な態度をとった³²⁾。

1908年9月6～9日、エミリア・ロマーニャ州モーデナにおいて開催された労働総同盟第2回大会は、傘下30万人の代表380名により、総同盟の組織に関する規約を一部改定したほか、労働総同盟と政党との関係について、労働総同盟は「労働総同盟の綱領と方法、および階級闘争の方法をうけいれる社会党および他党」と関係をもつことができるとし、また前年10月のフィレンツェ会議で決定された総同盟・社会党の役割分担の方針を承認する決議を行った³³⁾。

一方、革命的サンディカリストはこの総同盟第2回大会および翌月の社会党第10回大会に参加しないことを申し合わせていた³⁴⁾。

1908年10月7～10日、フィレンツェにおいてイタリア社会党第10回大会が、党员32,861名、689支部の代表400名により、アンドレア・コスタ (Andrea Costa) ほかを議長として開催された。議事は、統合派のモルガリを表面に立てつつ進行したが、実質的な主導権は改良派がとった。改良派が提出した決議案は、「社会党の諸原則および方法と、革命的サンディカリズムの理論および実践とは両立しがたいものである」と宣言し、そして、「集団性に対する一カテゴリーの攻撃であって、資本主義的一企業に対するプロレタリアートの闘いではないところの、公共サービスのストライキを断念する」と言いながら同時に「ストライキ権の廃止という根本的意図を法律の中に看破しうるようないかなる規定」も容認できないと宣言していた。

結局、改良派が提出した決議案が18,251票で採択され、統合派の決議案は5,957票、非妥協派と社会主義青年同盟が提出した決議案は5,384票を得たにとどまった。『アヴァンティ!』紙の編集長には改良派のビッソラーティが復帰した³⁵⁾。

この社会党第10回大会は、討議に盛り上りのない怠屈な大会であったと新聞に評されたが、その中では、当時改良派に属していたガエターノ・サルヴェミニ (Gaetano Salvemini) が南部の実情を説きつつ、普通選挙制度確立の重要性を訴えた決議案と演説が注目された。このサルヴェミニの決議案は別個に採択されたが、彼の演説には次のような内容が含まれていた。

南部イタリアでは北部と大いに事情が異なる。現行選挙法は読み書きできることと一定額の租税納入を選挙権取得要件にしているが、南部の大多数の労働者・農民は文盲と貧困のため、選挙権をもてない。北部では通常、2万人の人口の市で2,000人の有権者がいるが、南部では最高800人である。シチリア・アグリジェント県のシアッカ (Sciacca) では1,500人の農民が組合に加盟しているが、その内有権者はたった25人にすぎない。南部では選挙の際に、政府は恩恵を与えて代議士を与党化し、政府系議員は選挙区で自分のクリエンテラ

(clientela, 支持者)を保護し、クリエンテラは政府系議員を選出するという悪循環になっている。ミラノのトゥラーティは、1898、1899、1900年に抗議のために下院議員を辞職して、補選で再選されるという華々しい活動をしたが、これはこの選挙区に1万人の有権者がいて、全部を腐敗させることはできないからであり、もしもトゥラーティの区の有権者が1,000人ならば政府は自由にできるだろう。北部では議員は選挙を恐れるが、南部では農民は票を持っていないから、議員は政府しか恐れない。

「我々は改良について、合法的手段によって獲得すべきであると話しなければならない、——それを獲得するためのいかなる合法的手段も持たない人々に向って。そして、これが南部社会主義者の革命主義の秘密である。彼らは革命について饒舌をふるう以外にはないのだ。」「我々南部の者にとって、普通選挙は生か死かの問題である³⁶⁾。」

1908年は、12月28、29日のメッシーナ（シチリア）とレッジョ・カラブリアの大震災で暮れた。1909年2月13日、社会党指導部は、来る3月の下院総選挙に向けて、従来からの党独自候補擁立を一応言いつつも、「社会主義者が疑いもなく少数派と認められる選挙区においては、急進党や共和党の候補者の選出を可能にする態度をとること、それがフィレンツェ大会（第10回大会）の方針による政治活動である」という改良派の方針を公表した³⁷⁾。

1909年3月7日、15日の第23議会総選挙において、トゥラーティら社会党改良派は議会極左派諸党との選挙連合を推進し、成功を収めた。イタリア社会党の下院議席数は、前議会最多時の29議席から、今度の総選挙当選者35名と補選等による議員を加えて、第23議会においては43議席に増加した。また急進党49議席、共和党23議席を合せて、第23議会における議会極左派議席数は115議席と、全議席の約2割を占めるに至った。そして1909年3月25日、社会党の長老アンドレア・コスタが下院副議長に就任した。

注

29) Adolfo Pepe, *Movimento operaio e lotte sindacali 1880-1922*, Loescher, Torino, 1976, pp. 131~132.

30) *Ibidem*, pp. 132~133.

31) *Ibidem*, pp. 133~134.

32) *Attività parlamentare*……, *op. cit.*, p. 422.および Nicolai, *op. cit.*, pp. 21~22.

33) Adolfo Pepe, *Storia della CGdL della fondazione alla guerra di Libia 1905-1911*, Laterza, Bari, 1972, pp. 287~309.および Barbadoro, *op. cit.*, pp. 452~453.

34) Furiozzi, *op. cit.*, p. 40.

35) Ragionieri, *op. cit.*, p. 113.

36) Sotgiu, *op. cit.*, pp. 385~400.引用は p. 394.

37) Mammarella, *op. cit.*, p. 246.

V 総括

以上のごとく観察されたイタリア労働運動の分裂・対立を、歴史として顧れば、愚しくも悲劇的であったと総括せざるをえない。革命的サンディカリズム、改良主義的社会主義、カトリック社会運動、これらはいずれもイデオロギー即ち虚偽意識の表現形態であって、大衆が信をおくべきものではなかったのである。もとよりこれら虚偽の観念諸形態にも、その発生の所以はあり、「革命主義」には生産力的後進性や政治的無権利状態が、「改良主義」には社会的生産力上昇が「土台」となっている。

人間は歴史的に限界づけられており、今日知られていることも20世紀初頭の人々は知らなかった。人間はその限られた経験と知識によって精一杯自らを表現するほかはないのである。そして、この限定された表現が反省の契機なのである。人々の言語化され行動化された表現はすべて一転して表現主体に対し、疑念を生じさせ疑問を養い育てる否定的媒介となる。それゆえに人間は長い間に、それ自体は諸々の観念の中の一つにすぎないが、それにもかかわらず、虚偽を真実と見誤らせるイデオロギーを撃砕する働きをする観念をも生み出してきた。

しかし革命的サンディカリズムや改良主義的社会主義には、自己の存在を脅かすように感じられる出来事に対するほとんど反射的な心理的・肉体的活動を、正しい表現であり、そのようにする以外には他のいかなることもなしえない活動であるかのごとく主張する傾向が強く、このような傾向ないし「信念」同士が接触すると、互いに自己保存のために対立し、自らの内の疑いを抑圧するために互いに分裂するのであると考えられる。

そもそも労働運動などというものをおこさざるをえないほどにせっぱつまった人々の心に対し反省を求め、心を開く鍵となる概念として、例えば「階級闘争」などという人の好まない言葉があるのだろうと考えられる。

La scissione del movimento operaio italiano (1906 — 1908)

Ryusaku YOKOYAMA

Questo saggio oggettiva l'antagonismo e la scissione tra il sindacalismo rivoluzionario ed il riformismo nella storia del movimento operaio italiano dal 1906 al 1908.

L'autore considera che sia il sindacalismo sia il riformismo sono l'ideologie come l'espressioni della pseudo-coscienza. L'ideologia come l'espressione dell'alienazione genera l'antagonismo tragico e la scissione assurda.

- 7-10 ottobre 1906 Il IX congresso del partito socialista Italiano a Roma.
- 27 ottobre 1906 Il contratto tra l'ITALA e la FIAT.
- 16 marzo 1907 I patti colonici nella pianura bresciana della Federazione Provinciale dell'Unione Cattoliche del Lavoro.
- 3 marzo-2 giugno 1907 Lo sciopero agrario di Argenta ferrarese.
- 29 giugno-2 luglio 1907 Il primo convegno sindacalista di Ferrara.
- settembre 1907 Lo scioperi agrari di Copparo e Cerignola pugliese.
- 7-9 ottobre 1907 Il convegno dei direttivi del PSI e la Confederazione Generale del Lavoro a Firenze.
- 11 ottobre 1907 A Milano, durante uno sciopero dei gasisti, un operaio viene ucciso in uno scontro con la polizia.
- 2-3 novembre 1907 Creazione a Parma del Comitato Nazionale della Resistenza dai sindacalisti.
- 1 maggio-luglio 1908 Lo sciopero di Parma.
- 6-9 settembre 1908 Il II congresso della CGdL a Modena.
- 7-10 ottobre 1908 Il X congresso del PSI a Firenze.
- 7, 15 marzo 1909 L'elezioni politici per la XXIII legislatura.